

## 名古屋市「緑区誌」

10月25日午後、名古屋市緑生涯学習センターで講演した。講演後、センター長さんから、ここはかつて「鳴海町役場」だったと聞いた。翌日、名大中央図書館で『緑区誌』を手にとった。区制20周年記念として、1983年10月に刊行。写真のように、表紙は緑区の特産品である絞りを素材にした洒落た感じだ。デザインとともに、90ページにおよぶ「第2部 写真で見る緑区」はビジュアルに歴史を綴る。

新生「緑区」は長かった合併までの道を経て誕生した。1962年10月、鳴海町議会は満場一致で名古屋市との合併を議決した。名古屋市も5日、定例市議会で鳴海町を63年4月1日に編入するという合併を、満場一致で議決した。こうして鳴海町と名古屋市との合併は、地方政界をはげしくゆりうごかして、話が持ち上がってから、およそ8年ぶりで本決まりになった。

さて、区名は何とつけたらよいか。近く有松・大高町が一緒になるので、鳴海区とするわけにはいかない。3町共通の性格をあらわす区名は、愛知・海東・今川・南郊・緑丘などの地名。・・・東海道筋にできた町であるから東海区にしたらとの案もでたが、有松・大高町が一緒になった場合、大高には東海道が通っていないのでひっかかりがある。しかも当時、上野・横須賀町の合併も考えられていたので、この両町に東海製鉄があるのでダメ。90近い候補が上った中から名古屋市は悩んだ末、この地方が丘陵地帯であること、住宅適地として脚光を浴びていることなどから、鳴海町側の意向でもある「緑区」と決定した。

これが当時の新聞記事などの文献から拾うかぎりの「緑区」決定のいきさつであるが、ここに興味深い一つの考察を紹介したい。

「貞享5年鳴海に遊んだ芭蕉は、問屋場主人児玉源右エ衛門重辰宅の俳諧に臨んだ  
鳴海眺望                      はつ秋や 海も青田の 一みどり                      芭蕉

この歌仙興行は、翁の鳴海における最後のものとなったが、鳴海町が名古屋市に合併して緑区と名づけられた。由緒ある鳴海の新しい名が、芭蕉の句に詠まれていることは、知ってか知らずか偶然の一致であったことも、奇しき因縁といえよう」

(なるみ叢書第12冊より)

「重伝建」に選定された有松には、何回か行ったが、鳴海は今回初めて行った。「鳴海宿」など多くの散策マップをもらったので、まち歩きに訪れたい。

(2016年10月30日)

緑  
区  
誌

区制二十周年

